

洛和会京都看護学校 学校評価 令和7年度学校関係者評価結果

令和7年度洛和会京都看護学校の学校評価に係る自己評価結果を踏まえ、以下のとおり学校関係者評価を行ったので、ここに評価結果を取りまとめ、提出いたします。

1 基礎データ（令和7年度）

基礎データとして示された学生数、国家試験合格率、就職率の基礎データを概観する。

昨今、看護系専門学校の新入生の定員割れが取りざたされる中で、学生数は今年度も定員を満たしており、特に問題はない。引き続き学生確保に尽力されたい。

次に国家試験合格率について、看護学科は93.6%、助産学科は100%であった。学生の努力はもちろんのこと、21時まで学校を開放し、教職員や卒業生からの手厚いサポート体制を整えた点は評価できるが、看護学科については惜しくも100%を達成できなかったということで、次年度に期待したい。

また、就職率については看護学科、助産学科ともに就職希望者の就職率は100%を達成された。引き続き、就職に強い洛和会京都看護学校のイメージをさらに広めていただきたい。

2 評価項目

（1）教育理念・教育目的について

学校の教育理念・教育目的は、単なるお題目ではなく学校存立の支柱であり基盤である。これを学生がどれだけ理解し、教職員は様々な機会にどれだけ学生に伝えきれているかを把握し改善する必要がある。令和7年度のアンケート結果を見ると、教育理念、教育目的ともに、学生は「理解できた」とする割合が昨年度よりも上昇し、浸透していることが窺える。教員については「意識はしたが浸透には至っていない」「周知・浸透させる機会や時間が少ない」「伝え方が難しい」等の意見があったものの、周知しようという意識の改善がみられた点は評価できる。

しかしながら、「理念・目的を知らない」という学生の意見が少なからずあったことについては教員間でしっかりと話し合い、時間的・精神的に余裕をもって教育理念や教育目的を指導できるよう、体制の整備に努めていただきたい。次年度に向けてさらなる工夫が望まれる。

（2）学校運営について

教務事務というカテゴリをなくし管理部として統合したことについては、その成果を検証し、運営に生かしていただきたい。また、実習指導教員を増員したことによる学生指導への効果も検証が必要と考える。

会議や委員会の設置については、教職員の過度な負担を招くことのないよう業務負担軽減に努めつつ、よりよい学校運営のために連携して課題に取り組んでいただきたい。

(3) 教育課程・教育活動について

前年同様、アンケート調査でシラバスの有用性、カリキュラムの工夫、学修へのフォローについての学生及び教員の意識を比較されている。シラバスについて、授業内容を理解しやすく有用であったと答えた割合は看護学科の学生、助産学科の学生、教員、いずれも大幅にポイントが上昇しており、全体を通して満足した者が多かったことは高く評価できる。次年度も引き続き満足度を維持できるよう、さらに充実した内容にブラッシュアップしていただきたい。

カリキュラムについても同様に大幅にポイントが上昇していることから、前年度の反省をふまえて学生の学修理解が深まる工夫と改善を行った結果が表れており、教員の努力を感じられた。

一方で、教員の回答ではカリキュラムにあまり満足していないとの割合が 23.1%あることから、今回の結果に満足せず、引き続き学科全体で工夫と改善を続けていただき、より良いカリキュラムが提供されることを期待したい。

学修の躓きに対しては例年通り、教員に聞くよりも学生同士で解決しようとする学生が多かったが、「教員・指導者に聞く」を選択した者も前年度よりかなり上昇している。自己評価でも分析されていたが、新校舎になったことで教務員室への出入りがしやすくなり、教員とコミュニケーションが取りやすい環境になったことは大きな要因であろう。これを良いきっかけとして、学生と積極的にコミュニケーションをとって関わり、普段から質問や相談をしやすいい関係性づくりに努めていただきたい。

(4) 学修の到達度について

令和 7 年度の貴校の国家試験合格率は看護学科 93.5%、助産学科 100%であった。夏頃からは 21 時まで校内を開放し、教員や卒業生による指導が受けられる環境を整備するなど、学修支援の充実が図られている点は評価できる。一方で、看護学科については合格率 100%の達成には至らず、さらなる改善の余地がある。今後は、定期的な模擬試験の実施とその結果分析、学生一人ひとりの習熟度に応じた教材提供、ならびに教員および卒業生による学修支援体制の一層の強化を通じて、両学科における合格率 100%の達成に向けた取り組みの深化が期待される。

1、2 年生に対しては、ICT を活用した特別講義や新校舎移転に伴い導入された情報機器の活用により学修理解を深めるための工夫が図られている点、また基礎学力テストを試験的に導入し、学力把握に努めた取り組みも有意義であり評価できる。今後は、この基礎学力テストの結果をもとに、学生の学力や苦手分野に応じた科目選択・履修を行うことで、発展的科目における躓きの未然防止につながることを期待される。さらに、教員が学生個々の基礎学力レベルを把握できたことにより、一人ひとりに応じた指導の工夫が可能となっている点も非常に興味深い。引き続き本取組を継続し、早期段階から学修上の課題を把握し適切に対応していくことで、教育効果の一層の向上が期待される。

入学前の学生(合格者)に対しては、入学前教育プログラムへの参加を積極的に推奨し、学力の維持・向上を図る取組を実施された。特に、合格者の所属する高等学校に対して本

プログラムの情報提供および受講促進の依頼を行った結果、入学者のうち約 67%が受講し、一定の成果が認められた。今後は、現役生のみならず社会人を含めた幅広い層に対して受講を一層促進して受講率を向上させ、入学前からの学修基盤のさらなる強化を図っていただきたい。

【この学校を選択したことの満足度】については、「大変満足」「概ね満足」と回答した学生の割合が、看護学科で 90.4%、助産学科で 92.3%となっており、特に看護学科において前年度から大幅な向上が見られる点は評価できる。新校舎移転後間もないことから一部に改善の余地はあるものの、全体として学生の満足度は高い水準にあると考えられる。

一方、退学率については、看護学科において 1 年生 4.4%、2 年生 6.3%、3 年生 2.4%と、前年度比で 1 年生および 3 年生では減少したものの、2 年生では増加が見られる。看護学科においては依然として進路変更を理由とする退学が一定数見受けられ、今年度も 11 名の退学者が生じていることから、継続的な対応が求められる。今後は、洛和会メンタルサポート室との連携やチューター制による心理的支援の充実を図るとともに、入学時における進路意識の再確認を徹底するなど、退学防止に向けた取組のさらなる強化が期待される。

(5) 奨学金など学生への支援状況について

高等教育の修学支援新制度の活用状況は、令和 6 年度の 32 名から令和 7 年度は 53 名へと大幅に増加しており、多子世帯支援の拡充を背景に、学生の経済的負担軽減に寄与している点は評価できる。

また、洛和会奨学金をはじめ、社会人生活応援貸付金や特待生報奨金など、多様な経済支援制度が整備されている点も評価できる。特に洛和会奨学金については、看護学科学生 242 名中 191 名 (78.9%) の学生が利用しており、学生支援の中核的な制度として機能している。さらに、令和 6 年度からは保証会社を活用した機関保証が導入され、利用のしやすさ向上に取り組んでいる点も評価できる。

一方で、洛和会奨学金はグループ内の人材確保に資する制度であるが、学校法人としての公共性の観点からは、他医療機関への人材輩出についても一定の配慮が求められる。今後は、他病院の奨学金制度も含めた情報提供のあり方を検討し、より幅広い進路選択を支援する取組が期待される。

そのほか、京都府等の行政による修学支援や日本学生支援機構の奨学金、教育訓練給付制度などの活用も継続されており、学生が経済的負担を軽減しつつ学業に専念できる環境整備が図られている点は評価できる。今後も各制度の活用促進により、支援体制のさらなる充実が期待される。

(6) 教育資材・教育環境の整備について

【魅力を感じる本校の特色】については、「設備・教材教具」「ICT 環境」「施設」といったハード面に魅力を感じたと回答した学生の割合が、前年度と比較して大幅に上昇し

ている点は高く評価できる。新校舎移転に伴い、自習スペースを備えた図書室や広い実習室、シミュレーションルームの整備、さらに最新の ICT 機器の導入などにより、教育環境が大きく向上したことが学生の評価に反映されていると考えられる。

また、「教員・講師陣」を魅力とする回答も、看護学科・助産学科ともに前年度より上昇しており、教員に対する評価が高まっている点も評価できる。

一方で、本校の特色として掲げている「チューター制・タテ割りクラス」に対する魅力の認識は減少傾向にあり、教員個々への評価の高さに比べて制度としての認知と満足度に乖離が見られる。また、学生からは「期待していたほどのサポートが得られなかった」との意見も見受けられ、学修環境の整備が進む一方で、支援体制の運用面や関わり方において改善の余地が残されている。

今後は、ハード面の充実に加え、チューター制の運用の見直しや学生への周知の強化、個々の学生に寄り添ったきめ細かな指導体制の充実を図るなど、ソフト面の質の向上に取り組むことが求められる。

(7) 入学志願者増の取組について

オープンキャンパスの実施状況については、参加者数は 355 名と前年度の 255 名から 100 名増加している。特に社会人の参加を見込んで二部制を導入した点は、参加機会の拡大に寄与しており、新校舎移転の効果と相まって、集客の大幅増加につながった点は評価できる。助産学科においても、オンライン開催を取りやめ対面型に特化した結果、参加者数は 200 名と前年度 147 名から増加しており、施設の魅力を直接伝える取組が成果を上げていると考えられる。

また、オープンキャンパスに加え、「平日学校見学会」や個別相談会を実施し、多様な参加機会を設けた点も評価できる。これらの参加を出願要件としたこともあり、一定数の参加者確保につながっている。さらに、高校訪問の専任職員配置による継続的な訪問活動や、高校内ガイダンス、進路相談会、出前授業等の広報活動を積極的に展開したことは、志願者増加に大きく寄与した取組として評価できる。その結果、令和 8 年度入試においては、看護学科で志願者数が大幅に増加し、助産学科においても増加が見られるなど、募集活動の成果が数値として明確に表れている。少子化の影響や大学志向の増加により看護専門学校の学生募集が厳しさを増す中であって、定員を充足し続けている点は、本校の広報戦略および教育環境の魅力が一定程度評価されていることを示している。

一方で、今後も安定した志願者確保を図るためには、新校舎の魅力に依存するだけでなく、教育内容や学生支援などソフト面の充実と併せて、本校の特色をより効果的に発信していく必要がある。引き続き、SNS や各種媒体の活用を含めた広報戦略の強化と、高校との連携のさらなる深化を図ることが期待される。

(8) 特別活動について

卒業前の研修旅行については、令和 7 年度も継続して実施され、昨年度に引き続き韓国を研修地として 74 名が参加している。継続的な国際的視野の醸成や学修意欲の向上に

資する取組として評価できる。

また、学生自治会の発足により、水脈祭（学校祭）を学生主体で運営し、盛況であった点は、学生の主体性や協働性を育成する上で有意義な取組として評価できる。

さらに、東部文化会館で実施するキャンドルセレモニーについては、保護者に加え指定校の進路指導担当者へも案内を行い、高校生の見学機会を設けるなど、教育活動の発信および広報の観点からも効果的な取組と認められる。このほか、消防訓練や交通安全教室、20歳の誓い、ホームカミングデー、父母会など、多様な行事を実施しており、学生生活の充実および学校コミュニティの形成に寄与している点も評価できる。

今後は、これらの活動の教育的効果や学生の満足度をより体系的に把握・検証するとともに、学修面との連動を図りながら、イベントの質的向上および特色の明確化に取り組むことが期待される。

（９）地域・社会への貢献、他機関との連携状況について

本校は、運営母体である洛和会ヘルスケアシステムの各病院と連携し、地域医療の一翼を担う教育機関として、地域との関わりを重視した取組を継続的に実施している点は評価できる。従来から実施している保育所での手洗い指導に加え、前年度に引き続き助産学科の学生が地域の児童館と協働し、中高生と乳児との交流活動を実施するなど、世代間交流を通じた学びの機会を提供している。妊婦体験や産道体験、命の授業といった内容は、学生の実践的な学修機会としても有意義であると認められる。

また、地域包括支援センターと連携した認知症啓発イベントへの参加や、実習先である就労支援施設・障害者支援施設と連携した物品販売支援、NPO 法人のフードドライブへの協力など、多様な地域貢献活動を展開している点も評価できる。これらの取組は、学生が地域社会における看護職の役割を理解する上で重要な機会となっていると考えられる。

今後は、これらの活動の教育的効果や地域への波及効果を整理・可視化するとともに、地域との連携をさらに深化させ、看護系専門学校としての特色ある地域貢献活動の発信を一層強化していくことが期待される。

3 評点

項目	評点
①教育理念・目的	4.25
②学校運営	4
③教育課程・教育活動	4
④学修到達度	4
⑤学生支援	4
⑥教育資材・環境	4.5
⑦募集・応募	4.25
⑧特別活動	3.75
⑨地域貢献・機関連携	3.75

以上、「洛和会京都看護学校 学校評価実施要綱」に基づき令和7年度の自己評価結果を学校関係者により点検・評価を行った。

全体として、各項目において学生満足度の向上が認められたことから、前年度と比較して高い評点とした。今年度の評点平均値は4.06ポイントで、昨年度より0.25ポイント上回る結果となっており、教育環境および各種取組の改善が着実に成果として表れていると評価した。

新校舎への移転を契機とした教育環境の充実は一定の効果を上げており、今後はその環境を最大限に活用しつつ、看護師および助産師国家試験の合格率100%の達成に向けて、さらなる学修支援の充実が求められる。

また、本評価結果については学内で共有し、PDCAサイクルに基づく継続的な改善活動に活用することで、教育の質保証および学校運営の高度化につなげていくことが期待される。

(参考)

学校関係者評価委員会

学校法人洛和学園評議員1名、同窓会関係者1名、実習先関係者2名 計4名